

中 風は湊から

文責 校長 永田 泰志

主体的に学習に取り組む生徒の育成

今年度も折り返し地点を過ぎ、10月15日(火)には前期の通知表を渡しました。後半も充実した学校生活を送ってくれることを期待しています。



今年4月に実施しました「全国学力・学習状況調査」の結果を学校ホームページにアップしています。本校生徒の状況を分析し、その対応策をまとめています。ご覧いただければと思います。

さて、本校では昨年度から唐津市教育委員会の指定を受け、大妻女子大学の樺山先生に指導・助言をいただきながら、「主体的に学習に取り組む生徒の育成」を目指し、ラーニング・マウンテン(学びの文脈)を活用した授業改善・研究を進め、本日授業を公開しました。

本校生徒は、素直で親しみやすい面を多くもっている一方で、学習を「やらされている」と感じている生徒も少なくありません。そこで、昨年度から各教科の単元ごとの学習の進め方の大枠をルーティン化して、生徒が次に何をすべきか一定の方向性を示してきました。また、課題設定や解決方法などを生徒が選択できるようにすることで、学習への【期待感】や学習を終えたときの【充実感】を感じさせる授業を展開しています。また、課題解決の課程で



の協働的な学びを通して、それぞれの生徒の【存在感】や互いの考えが尊重され、課題解決に有効に働いているという【効力感】を感じさせるよう取り組んできました。この2年間の授業改善・研究を通して、学習を「自分ごと」として捉え、主体的に学習に取り組む生徒が増えてきたと感じています。

しかし、授業改善・研究は今年度で終わるのではなく、これからも授業をより良いものに改善していき、

しかし、授業改善・研究は今年度で終わるのではなく、これからも授業をより良いものに改善していき、

感謝・自立・挑戦

生徒たちに将来にわたって必要な生きる力を身につけさせたいと思います。そして、ラーニング・マウンテンを活用しながら、「自ら課題を設定し、解決する力」を身につけさせるため、我々が日々「学び続ける教師集団」であり続け、授業改善に今後も全職員で取り組み、本校で学んだことが社会に出てからも生かせるよう各教科で創意工夫した授業を実践していきたいと考えます。



今後の行事予定

11月

- 3日(日)祝 文化の日
- 4日(月)振替休日
- 5日(火)実力テスト(~6日)
- 6日(水)市内一斉部活動停止日
- 7日(木)生徒会各部会
- 8日(金)3年保護者進路説明会
- 9日(土)唐津地区青少年意見発表大会
- 12日(火)QUテスト
- 13日(水)全校朝会(生徒会)
- 17日(日)県内一斉部活動休養日
- 18日(月)後期中間テスト前部活動停止
(~21日)
- 21日(木)後期中間テスト(~22日)
原子力防災訓練
- 23日(土)祝 勤労感謝の日
- 24日(日)湊神祭
- 25日(月)3年生神集島ボランティア活動
- 26日(火)1年生薬物乱用防止教室
- 28日(木)湊中学校入学説明会
- 29日(金)生活アンケート

※今月も学年ごとの行事も予定しています。各学級から配布される学級通信等もご確認ください。



頑張っています、湊中生。



○青少年読書感想文コンクール

【唐津地区審査】（自由図書）

特選 3年 笹山明香里さん「手紙から得た『生きる』」

特選 2年 笹山 舞さん「人と向き合うことによって」

入選 3年 田島 友香さん「命の尊さ」

入選 2年 伊藤 沙夏さん「自立と家族の形」

入選 1年 保利 葵さん「努力と支えの力」

入選 1年 北方 心菜さん「夕日」

○唐津地区中体連駅伝競走大会

★男子16位、女子17位でしたが、全員が一本の襷をつなぐことができました👏。

○唐津地区中学生新人ソフトテニス大会

★団体戦にオープンで参加しました。部員全員が1試合勝ちました👏。

○唐津地区中学生新人バレーボール大会

（予選リーグ）

湊・肥前中 0(7-25 7-25)2 第五中

湊・肥前中 0(17-25 14-25)2 鬼塚中

（決勝トーナメント）

湊・肥前中 0(24-26 16-25)2 北波多中



『情熱と行動力』

1964年11月8日、この日は何の日かご存じですか。ヒントは、この年の10月10日に東京オリンピックの開会式が行われました。そうです、じつは、この日は東京パラリンピックの開会式が行われた日です。21か国の車いすの選手が集い、日本からの出場者は53人でした。その人たちは、ほとんどが国立病院・療養所の患者や訓練生で、仕事をしていたのは自営業の5人だけ。一人で外出もかなわず、ましてスポーツなどとは全く縁がないのが、当時の障害を持った方々の置かれた状況でした。

そこに風穴を開けたのが、東京パラリンピックだったのです。そして、この最初の一步を踏み出すのに大きな役割を果たしたのは、一人の医師、中村裕（なかむら ゆたか）さんでした。中村さんは、1927年、大分県生まれ。国立別府病院の整形外科医だ



った1960年にイギリスの病院を訪れ、衝撃を受けました。その当時、日本でなら再起不能とみなされそうな患者が、半年ほどで退院し、社会復帰を果たしていたからです。

その秘訣は、スポーツにありました。車いすで卓球やバスケットボールに打ち込み、リハビリ効果を上げていたのです。指導を受けたグッドマン博士の理念、『失ったものを数えるな！残されたものを最大限に生かせ！』を体現しようと、帰国直後から奔走し、障害者体育大会を開きました。「無茶なことを！」、「選手がけがをしたらどうする！」と批判があっても動じませんでした。中村さんには『これは間違いなく患者のためになる』という確信があったからでしょう。そして、1964年の東京パラリンピックでは、団長を務めました。この間に日本身体障害者スポーツ協会も生まれ、多くの人々の手によってこぎつけた開催だったとはいえ、中村さんが推し進めた数々の活動が最大の原動力になったのは間違いありません。その時37歳。若き医師の情熱が、日本のパラリンピック運動の扉を開いたのです。



① 明日から佐賀ではSAGA2024全障スポが開催されます。また、今年の夏にはパリでパラリンピックが開催され、車いすテニスで小田凱人（おだ とくと）選手が金メダルを獲得したことはまだ記憶に新しいところです。身体を目一杯使い、動きに工夫を凝らして、自らの可能性に挑む。そんなパラリンピアンの方々の姿は、障害や世代、性別、国籍を超越した人間の「個」としての尊さを伝え、一人一人の違いを認め合うことの大切さを私たちに教えてくれました。

先日、ある生徒に「青春はいつまで？」と尋ねると、「校長先生、死ぬまで青春ですよ！」と嬉しい答えが返ってきました。

しかし、眼鏡をかけている人は、眼鏡を外した途端、歩くのもままならなくなります。老いると視力が衰え、足腰が弱くなります。私たちは、誰もが身体に障害を持つ可能性と地続きの世界にいます。そのことに改めて気づかせてくれたのが、パラリンピックではないでしょうか。この気づきの種をこれから大きく皆で育てていきたいところです。

